

河童と見た空

前川 亜希子

京の街に降る雪が、稀に奇跡を起こすと誰かが言っていた。

まどろみから引き抜かれるように薄目を開けると、天井がにごった青色を反射していた。窓から差し込む曇り空のせいだ。のろろと体を起こして外を眺めると、灰色の雲が帯のように空を流れ、その隙間からわずかに青色が覗くのが見えた。

水底のような深い色の空だなんて、この季節にはめずらしい。

かつて彼と眺めていたような空だ。鼓動が華やいでいるのに気がついて、わたしは思わず胸を押さえた。なつかしい熱情だった。

衝動的に家を飛び出して空港へ向かった。京都へ越してちょうど五年になる朝だった。そしてわたしの二十三歳の誕生日でもあった。

自分は人にきらわれるために生まれてきたのだと思っていた時期があった。物心ついたときに両親はなく、親戚の間をたらい回しにされ、転校先の学校でもあまり歓迎されなかった中学生のころだ。当時一緒に暮らしていた遠縁の鈴木さんにはたいそう疎まれて、理由もなくぶたれることさえしばしばだった。

彼に出会ったのは、そんなある日のことだった。

鈴木さんの恋人が来て家を追い出されたので、行く当てもなく近所の神社へ歩いた。こういう場合は大抵、境内の雑木林で木の幹に腰掛けてぼうつと空を眺めていたが、しばらくするとあまりの寒さにつま先まで痺れてきた。かと言って帰るわけにもゆかず、途方に暮れて境内にある小屋へ忍び込んだ。

そうしていつしか部屋の隅で眠り込んでいた。

目を覚ますと、たまに公園で本を読んでいる、話したことのない男の子がわたしの顔をのぞきこんでいた。わたしが身構えると、彼は目を細めて笑った。抜けていく空のように青みがかつた灰色の瞳をしていた。

「かくれんぼでもしてるの？」

と、男の子は屈託なく笑った。じつと押し黙ったままうつむくわたしの手を引いて、彼は「おいで」と言った。その透きとおった瞳に惹かれたのか、わたしは何も言わずに従った。彼が小屋の扉を開けると、冷たい空気で鼻の奥がつんとした。

「目をつむって。僕がいつて言うまで」

わたしはこくりとうなずいて吹雪の中へ踏み出した。目をつむった真つ暗な世界に風の吹き荒れる音だけが響いていた。途中、身体が薄くてひんやりした膜を突き抜けるような感覚があり、「目を開けてもいいよ」と言われたときには、この世とは思えぬふしぎな場所に立っていた。

そこでは、すべてが青かった。淡くて、どこか優しく光る青色の世界だった。

「実はね、神社の池の中なんだ。」

彼の言葉を信じるのはとてもむずかしかった。体が浮くことも、息が苦しくなることも、体が濡れることもなかったから。

青森便の飛行機は空いていた。乗り込んだときからうとうととしていたので、飛行機がいつ離陸したのかさえわからぬまま目を覚まし、窓の外を見てみると蒼い世界が眼下に広がっていた。

あのとき、非科学的な現実に戸惑っているわたしを前に、彼は照れくさそうに笑いながら、「実は僕、河童なんだ」と言って持っていた本の挿絵を指

さした。緑色の体に甲羅、頭には皿をもつ妖怪が描かれていた。

「どうして姿がちがうの？」とわたしが尋ねると「河童だと思われてるのは人間の勝手な想像だろ。僕は人を溺れさせたり、血を吸ったりなんかしないよ」と、彼は憤然と言った。

「僕らの祖先は確かにこうだった姿だったのかもしれない。でも、人への憧れが強すぎるあまりに姿まで変わっていったんだ。僕が人間とちがうのは、池の中に棲んでいることや瞳の色、水かきの名残がある、それくらいだよ」「気が済むまでいなよ」という彼は、わたしの事情をなんとなく知っているらしかった。

それからしばらく、河童と一緒に暮らした。気ままな生活だった。お腹が鳴ると池の祠に供えられたお餅をつまみ、あくびを合図に寄り添って眠り、あるいは寝ころんで空を眺めていた。

水底から覗く空はとても遠く、光を揺らめかせて刻々と変わっていく。せつないくらいの憧れのきもちでいっぱいになり、自分の小ささを痛感する。

「悲しいときは空を眺めるんだよ」と彼は言った。

「上を向いているから涙がこぼれない。それに、空は寛大だから、きつと受け入れてくれる。でも、助けてはくれないから、そこから先は自分自身の役目なんだ」

彼はいつも穏やかに笑っていたけれど、一度だけ、大声で叱られたことがある。悪夢を見て泣きじゃくっていた朝のことだ。

「わたしは人にきらわれるために生まれてきたんだ」

わたしの言葉に、河童はめずらしく眉をつり上げて、「弱虫」と言った。

「壁をつくってるのは君の方だよ。君がとてもきれいで賢いから、みんなは戸惑ってるだけだ。君によくいじわるしてる田中くんなんか、いつもぼうつ

と君を見る。本当はなかよくしたいんだよ。僕だっていつも君を見かけて心配してた。木の幹に腰掛けて、時が過ぎるのをじっと待ってる君を。それなのに、きらわれるために生まれてきただなんて、本気で言ってるの？ 僕が君のこと嫌いだって、そう思う？」

わたしは下くちびるをきゅう、と噛んで、首を横に振った。

すると彼は目を細めてからりと笑った。その笑顔があまりにも優しく温かったので、思わず泣いてしまった。胸の内がこんなに温かいのは生まれてはじめてだった。

青森へついたのは、とつぷりと日が暮れてからだった。

急いで向かった夜の神社は音が雪に吸い込まれたみたいに静かだ。凍った路面は青白く、月光がてらてらと反射している。あるとき隠れた小屋の前を横切ると、すぐに池が見えた。

白く凍りついた水の中に生き物の気配はない。そっと彼の名を呼んだ。冷たい雪面にひざまずいて厚く張った氷を叩いた。

けれど、しんしんと雪が降るばかりで何の反応もない。もう何度も繰り返し試してきたことだ。わたしがいくら呼んでも、彼は二度と現れてくれなかった。

河童と暮らして一か月ほど経った朝のことだった。

金色の光にまぶたをくすぐられて目を覚ました。あまりに空がきれいだったので、隣で寝息を立てている彼を起こさぬようにそっと立ち上がって、椅子を踏み台に空へ手を伸ばしてみた。そうして思い切り背伸びをしたとき、水面に手がふれた。

瞬間、指先から青い空気がどんどん抜けていって、身体がとてもあたたか

く、どこからかふつくらした花の香りが漂ってきた。

名前を呼ばれて振り返ると、彼が茫然と立ちつくしていた。深い灰色の瞳が、哀しく光っていた。彼がなにか言いながら、青いビー玉のようなものを投げてよこしたけれど、視界が泡で覆われて、その言葉も一緒に弾けた。

そしてわたしは、きらきらした甘いまどろみの中へと落ち込んでいった。

目を覚ましたのは、蝶々が髪に止まったからだだった。ゆらめく水面の代わりに白い天井があった。窓の外から雲雀のさえずりが聞こえた。

「目を開けたよ」という声と共に抱きしめられた。隣のおばさんだった。途端にわたしは現実に引き込まれ、病院にいることを知った。

「神社のね、池のそばに倒れてたんだよ」とおばさんが言った。

花を持って見舞いに来てくれた田中くんは、別人のように背が伸びていた。医者や警察に新聞記者、たくさんの方が次々にわたしを訪ねてきて、「この二年間、一体どこで何をしていたのか」と尋ねた。誰もが好奇心むき出しの視線をわたしに投げかけていた。

その後わたしは、子どものない、そのおばさん夫婦に引き取られることになった。

それから幾度もあの神社に足を運び、池に向かって呼びかけたり、手を浸したりしたけれど、結局彼の姿を再び見ることはなかった。河童と見た空が愛おしくて、わたしはいつも泣かぬように上を向く子どもになった。ふしぎなもので、顔を上げるだけで世界が違って見える。気がつくとなわたしは、ひとりぼっちじゃなくなっていた。

やがて高校生になり、わたしは田中くんと一年くらい付き合って、そして別れた。

「ただいま」

インターホンを押すと、義母が嬉々としてわたしを迎え入れ、熱いほうじ茶をいれてくれた。義父は、わたしの好物を買いにスーパーへ車を飛ばしている。やかんの沸く音、りんごの甘酸っぱい香り、犬の鳴き声。すべて鈴木さんの家にはなかったものだ。

テレビを観ていると、義母が思い出したように「神社であなたを見つけたときに、握りしめてたものがあつたの」と言って立ち上がった。

「この間、あなたの制服のポケットから見つけてね」

義母が差し出したのは、空をビー玉の中に閉じこめたような、青い珠だった。てのひらにのせると、生きているみたいに温かった。

『僕は祈ってる。君にすべての幸せが降り注ぐように。これを持っていくれたら、呼んでくれたら、きつとそばへ行くから』

水の泡にはばまれて、よく聞こえなかった彼の最後の声がようやく、聞こえたような気がして、うるんだ目を押さえながら家を飛び出した。息を切らして神社の林を走っていると、一点、月光の落ちる場所が見えた。わたしたちの暮らした池だ。

「ねえ、見えてるんでしょ、わたしの姿。わたしが泣いてるの。そばにいてくれるって、言ったじゃない」

わたしの声は、銀の雪に吸い込まれて消えた。

「うそつき」

翌日の飛行機で京都へ戻った。

部屋の前で鍵を捜していると、空室だった隣のドアが開いて、背の高い男の人が「こんにちは」と頭を下げた。わたしは無愛想に会釈をした。

「さつき、引越してきました。……やっと呼ばれたから」

訝しく思っつて顔を上げると、男の人は目を細めてからりと笑った。青みがかったくすんだ灰色の瞳だった。

開け放たれた廊下の窓から一陣の風が吹いて、舞い込んできた冷たい粒が頬をぬらした。

京の街に降る雪が、稀に奇跡を起こすと誰かが言っていた。

これから、河童と一緒に空を見あげて生きていこうと、そのとき思った。